

日本台湾交流協会の事業御紹介

高齢化社会への対応は、日台共通の重要課題です。台湾では外国人労働者による介護サービスに大きく依存しているため、提供されるサービスの質の問題が生じており、台湾出身の高度な介護人材の育成・確保が急務となっています。こうした状況を鑑み、当協会では、2018年に台湾の介護士や行政機関の方々に日本の介護制度や介護サービスを学んで頂く機会を提供する「台湾人介護・福祉専門家育成事業」を立ち上げました。第一期生は2018年9月から2ヶ月間、10名の介護士等に長野県の佐久大学で日本語学習と日本型介護の理論と実習を行いました。そのうち2名の感想をご紹介します。

2018年度台湾人介護・福祉専門家育成事業 訪日研修プログラムの参加を通じて ～日本での介護学習の旅～

陳 秀満：伯大尼老人養護施設ケアフロア 副組長

【日本の佐久大学での介護学習の旅】

私は陳秀満です。偶然が重なって長期介護の世界に入り込んだ、まだまだ駆け出しの子羊です。介護現場の最前線で4年間ケアサービスに従事してきた私が、日本台湾交流協会の実施する台湾人介護・福祉専門家育成事業訪日研修プログラムへ参加する機会を得られたことを、非常光栄に思うと共に大変感謝しています。

【日本の佐久大学への介護学習の旅へ出発】

「介護」という言葉だけを取ると簡単な表現に見えますが、身体、心理、感覚器官、思考及び行為といったものが奥深く関わっており、高い専門性が必要とされます。また介護とは、私たちにとって将来の生活スタイルとなるものです。

【「介護」は生活の中のあらゆる行為】

介護等では不便な身体のため、掃除や食事など日常のあらゆることを行うことをサポートする必要があります。その中で、私にとって最も深く知り学びたいことは、身体と生活の拘束状況です。

特別養護老人ホームみついの研修では、実際の

実習と高齢者との双方向のやり取りを通して、身体拘束は行われておらず、心も体も自由にリラックスしており、高齢者たちはしっかりと四季の変化を感じることができ、自由に快適な生活を送れていることを知ることができました。

この介護施設で、小林美恵先生と森泉衣子先生が身体拘束の経験について交流する時間を手配いただき、「介護施設は高齢者の生活をケアする場所であり、高齢者がこうした生活を送るために障害となるようなことはしてはいけない」と教えてくれました。高齢者たちを拘束すると身体機能の





低下を招き、精神状態も悪化し、心の不安も感じてしまうことなどで、介護スタッフの皆さんも仕事へのやり甲斐を感じられなくなってしまいます。また、高齢者のご家族にとっても、後ろめたさや恐れを感じるようになります。こうした判断から、先生たちは大きな決断をし、自らの手で高齢者を身体拘束していた紐を切ったそうです。小林先生も森先生も、紐を切る瞬間は非常に躊躇したということですが、高齢者の方々のため、拘束の紐を全て切ったと語られていました。

小林先生も森先生も最初の一週間は、高齢者の方達を大解放したことに不安も感じていましたが、高齢者の皆さんも少しずつ生活の歩調に慣れていきました。介護施設では、安心して寛いだ雰囲気生まれ、高齢者の皆さんの感情も自然と安定

し、全てが日常生活に戻り、介護スタッフもモチベーションが上がっていきました。身体拘束は体に痛みを与え、認知症を悪化させるとともに、高齢者のご家族にも苦しみをもたらすものとなっていたのです。

【台湾の介護施設における身体拘束の愛と壁】

日本での2か月間の介護学習の旅を終え、職場に復帰した際、私は茫然としました。

職場に復帰し、私が目の当たりにしたのは日本の介護施設とは全く異なる形態だったのです。かつて私が慣れ親しんでいた全て。しかし、私は力になることができず、茫然としたのです。この施設では身体拘束がいとも簡単に行われていました。軽いものでは行動の制限、深刻なものであれば身体拘束をしています。こうした高齢者の中で、私が忘れられない方がいます。日常の生活では車椅子に紐で縛り付けられ、夜寝る時間になるとベッドに手足を縛られていました。こうした措置は、経鼻胃管が抜かれないこと、そして転倒を防止するために行われていたものです。

私は、この苦しみをどのようにしてサポートできるのか考え始め、まず、介護スタッフに経鼻胃管を外すことができるかどうか聞きました。笑いながら、「何でも理想的に解決できないのが人生でしょ。」「経鼻胃管を外してみても良いけど、痰や食べ物が喉に詰まった時、誰が責任を持ち処理



に当たるの？家族はこのことに同意すると思う？」と聞き返されてしまいました。経鼻胃管を繰り返し取り外していると感染の恐れも出てきます。この側面から糸口を探るのは難しいと感じ、まずは身体拘束を解放することはできないかと考えました。しかし、同僚が語ったとおり、何でも理想的には解決できません。身体拘束をすれば最も簡単にケアできるのに、どうして仕事の負担を増やすような提案をするのかと、同僚からも煙たがられるようになってしまいました。

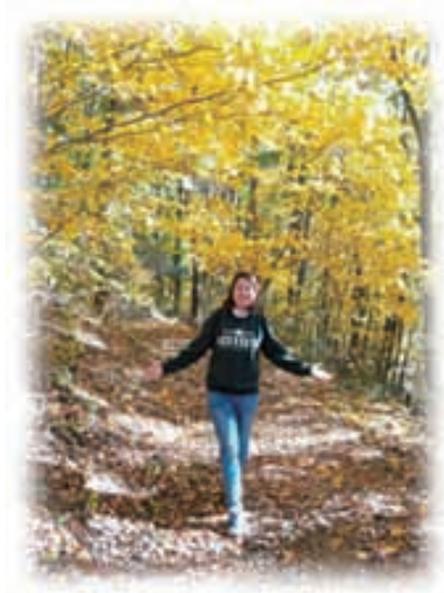
看護部門が同意せず、同僚にも受け入れられず、どうしようもなくなってしまい、恐怖と無力感で、私自身もモチベーションを失ってしまいそうになりました。そのため、私は直接看護部長にこのことを相談し、自分がやりたいと思っていることを伝えました。話を聞いた看護部長は、私を強く励まし、一緒になって高齢者の状況について話し合い、ケアのプロセスを策定し、家族とも経鼻胃管を取り外すし身体拘束を解く可能性について状況を話し合ってくれました。施設の高齢者の方々に春がやってきたのです。看護部長には心から感謝しています。

当初、高齢者が激しく動くなど、介護スタッフも焦りを感じ、看護スタッフも不安を感じ緊張が走りました。私は、小林美恵先生及び森泉衣子先生のようにずっとスタッフを励まし、年長者の過去の生活習慣を理解し、私たちの施設で生活できるよう訓練し、自宅に戻ったかのような感覚を持てるよう努力した結果、高齢者の方々も少しずつ落ち着きを取り戻していきました。こうした状況が徐々に軌道に乗り、高齢者の思考も改善しまし

た。また、高齢者の方が我々スタッフに感謝の言葉を伝えた時には、自分の心が愛と温もりでいっぱいになりました。身体拘束は他人の行為や能力を制限する最悪の介護のやり方であり、高齢者の気持ちを理解し、彼らの立場に立って物事を考えることが大切です。

【感謝】

日本台湾交流協会とアジアンワイズには、行き渡った介護学習を手配していただき心から感謝いたします。また、佐久大学理事長、校長、また我々が日台介護の発展、介護の仕事を行うための重要な使命と将来を理解できるように研修プログラムを計画実施いただき感謝いたします。そして、特別養護老人ホームみついの高齢者及び介護スタッフの皆様にも、貴重な経験を共有いただき、我々に介護の大切さを教えてくださったことに感謝します。



2018 年度台湾人介護・福祉専門家育成事業 訪日研修プログラムの参加を通じて ～学習と収穫～

李 静宜：台南市政府介護管理センター 介護管理監督指導員

【面接合格と訪日前の準備】

皆様ご存知のとおり、日本は世界で最も高齢化が深刻な国です。それ故に日本は、早くから介護を発展させるとともに、介護保険も推進し、各国の学びの対象となってきました。

日本台湾交流協会が佐久大学とアジアンワイズとともに、この訪日研修プロジェクトを実施すると知るや、私はこの訪日研修プログラムへの参加のチャンスを得て、日本における長期介護の推進状況を学ぶため、必死になって家族や上司を説得しました。幸運なことに、その後、面接試験に合格し、訪日研修のチャンスを手にすることができました。合格したことに非常に興奮するとともに、日本で学ぶに当たって自らに目標を設定し、日本において深く観察し、学ぶことができるよう努めました。台湾では2016年から長期介護10年計画を長期介護2.0へとバージョンアップし、介護リソース配置の面においても、人々の利用率の面においても、長期介護は顕著に進歩・成長しています。しかしながら、依然として解決を要する困難な課題が存在することも実情です。介護従事者の人手不足、都市と地方における介護リソースカバー率の不均衡、スマート介護の発展、各施設における看護の質の管理などが例として挙げられます。これらは全て私が日本での研修を通じて深く観察し、学びたい主要なテーマでした。このほか、私個人の仕事として、台南市の長期介護管理、長期介護リソース管理及びリソースの設置、長期



介護の質の監督を担っており、常日頃から業務の関係で長期介護人材育成にかかる協力を求められます。故に、自分自身の専門知識をレベルアップし、実務に応用することによって台湾の長期介護人材の育成のサポートし、台湾全体の長期介護の質と国際競争力の向上に繋がりたいと考えました。

一方、訪日研修に対して大きな期待を抱いていましたが、当初は緊張もし、言葉や文化、風習、生活習慣も異なるため、日本での生活に適應できないのではないかと不安も持っていました。幸い、2度の事前説明会を通じ、研修への理解を更に深めることができたので、私が胸に抱えていた不安は大きく軽減されました。訪日前の記者発表会に参加した後は、これから始まる訪日研修に自信満々で挑むことができました。

【日本での研修】

(日本語に悪戦苦闘)

日本に到着し、2か月間の研修プログラムがスタートしました。プログラムには2つの重点があります。一つは基礎日本語と日本文化理解、もう一つが長期介護施設の視察と同施設での実務研修です。

始めの1か月は、日本語と日本文化の習得を重点に取り組みました。場所は長野県の佐久短期大学です。佐久は非常に美しい場所で、日本で最初に地域包括ケアが発展したモデル地域です。台湾は今まさに、これを参考にABCコミュニティ包括ケアサービスを推進しています。私はここで長期介護の研修を受けることができることをとても嬉しく思いました。

日本語の学習は、私にとって非常に頭が痛く苦しいものでした。特に、初めて50音に接した時は、何度も壁にぶつかり、もう投げ出したいという思いが何回も沸き起こりました。幸いにも、先生に辛抱強く指導してもらった結果、徐々に壁を克服することができ、施設では日本語を使って住人の方々とコミュニケーションが取れるまでになりました。

壁にはぶつかったものの、基礎日本語と長期介護施設の常用のコミュニケーション言語を学んだ



ため、見習いとして施設に入る際に、言葉でコミュニケーションを図り、施設の住人と深く、密接な意思疎通をすることができ、こうした意思疎通ができたからこそ、住人の方々が私たちのことを受け入れてくれたのだと思います。このようにして、私たちは日本の介護精神を深く観察し学ぶことができたとともに、大いに啓発されました。日本文化を習熟するための学習も、私たちが施設で諸先輩方の考え方をより受け入れやすく、また、彼らの文化に溶け込む上で非常に役立ち、現地の文化を理解できず誤解を生じてしまうといった問題を避けることができたと思います。

(実際の介護現場へ)

2か月目は、各長期介護施設へ赴き、実際に施設の中に入って実務研修を行いました。私たちは佐久病院、小規模且つ多機能の介護センター、デイケアセンター及び老人ホームを訪れました。個々異なるニーズに基づいて、日本は各種異なる形態の長期介護モデルを発展させてきました。在宅サービス、地域密着サービス、施設サービス、いずれの長期介護モデルであっても、私が日本で見たことは、介護現場において個別の案件を尊重しており、それを口先だけでなく、実際の介護の中で実行している姿です。例を挙げると、高齢者を



身体拘束せず、そのことが立法規定に明記されています。個別の案件を尊重しようとする意志は、個別の生活習慣に沿って介護を提供するということに表れており、施設の介護標準規定に基づいて個別の案件を処理することはしません。効果の無い医療は推奨しない（例えば経鼻胃管、気管切開、救急）・・・等。このほか、個別案件を重視する以外に、日本は介護福祉士（台湾の照顧服務員）の仕事の安全も非常に重視し、工作中的の怪我を回避するための各種措置を策定しています。この中には、例えば、高齢者の身体を移動する際の効率的な技術を習得するための訓練の実施、或いは、高齢者の移動をサポートする機器を使用し介護従事者の腰の損傷を防ぐといったことが挙げられます。さらに、日本は個別の案件において、被介護者が可能な限り自分自身の力を最大限発揮し、自立した生活を送ることを推奨しています。これは、台湾の文化でもある全て助けてあげようとする考えとは異なる点です。

【日本での経験を台湾の介護関係者へ】

日本での2か月間の研修を通じ、非常に多くのものを見、多くのことを学びました。しかし、私が最も感動させられたことは、個別の案件への尊重であり、それぞれの状況に基づいた独立した対応が行われていること、そして、施設で働く介護従事者を大切にしていることです。

台湾へ戻った後、現在担当している業務が介護管理・監督指導であるため、常日頃からケアマネジャー、介護福祉士、在宅サービス監督・指導及び介護学部学生といった介護実務従事者を支援するため講義を行うことが求められています。私自身、こうした講義の機会に日本で習得した介護の知識や技術或いは観念を受講者に伝え、繰り返し教えることによって、受講者の方々にどのように介護の現場で活用していくのかを理解できるよう、また、個別の案件に応じた運用できるよう努



めています。

それぞれの高齢者が可能な限り自立した生活を送ってもらうという観念はとても重要です。現在、台湾は新たにリハビリサービスを推し進めているのは、まさにこうした観念に基づくものです。リハビリサービスを通じて、それぞれの高齢者が最適な生活能力を取り戻してくれるようになることを期待しています。しかし、この観念は台湾の看護文化と相容れない部分もあり、なかなか順調には進んでいません。しかし、日本の可能な限り高齢者に自立を促すという看護の観念を基に説明を行うことにより、リハビリサービスと相互に呼応できれば、サービスを受ける人や長期介護サービスに従事する人も比較的容易に理解でき受け入れられるのではないかと思います。

【訪日研修に参加して】

長期介護はとても深い学問であり、各々の高齢者の実際の需要を理解・尊重し、介護をそれぞれの高齢者の生活の中で実施していくことが大切です。日本で研修に参加して学んできたものを、台湾へ戻った後に実際の仕事の中で活用することができ、また、講義を通じて日本で習得したものを長期介護サービス従事者に伝えることもでき、とても嬉しく感じています。一個人のできることには限りがありますが、長期にわたって努力を続けることによりそれも力となります。台湾の長期介



護がより整った、より良いものとなるよう、また、長期介護を必要とする人が十分に、そして尊重され、高齢者の日常生活に寄り沿った介護を受けられる環境が築かれていくことを望んでいます。